「IoT・AIを生かしたクールジャパン」ユーザー主導の日本ブランドとその未来―日本PTCフォーラム2017抄録―

PTC日本委員会

1. はじめに

2017年5月29日(月)、PTC日本委員会の主催によるフォーラム「日本PTCフォーラム2017」が、主婦会館プラザエフ(東京都千代田区)で開催された。今回のテーマは「IoT・AIを生かしたクールジャパン」。IoT・AIを駆使してポップ分野、アニメ分野とその分野での技術に関する第一人者が参加し、クールジャパンについておおいに語った。

まず冒頭では、鍋倉眞一氏(PTC日本委員会委員長)による主催者挨拶が行われた。また、シャロン・ナカマ氏(PTC本部CEO)によるPTC本部の活動紹介プレゼンテーションも行われた。

2. 日本ではユーザーが技術の応用を牽引

続いて、中村伊知哉氏(慶應義塾大学メディアデザイン研究科教授)による基調講演が行われた。日本のコンテンツ発信に数多く携わってきた経験から、日本のブランドイメージの本質や課題、2020年の東京五輪を見据えた取組みなど、様々なテーマが取り上げられた。

まず、海外から見た日本のブランドイメージについて、もはやかつての「ものづくり」ではなく、若い世代では日本と言えばアニメやゲームであり、日本はポップカルチャーの国になったという。さらに言えば、今や海外の人たちの方が、日本の文化について詳しい。彼らが考える日本の「クール」として、マッサージチェア、給食当番、交番、日本のお母さん、といった事柄を紹介した。

こう述べた上で、アニメやゲームだけでなく、様々な分野でクリエティビティを発揮してきた日本のカルチャーを牽引してきたのは、政府でも企業でもなく、ユーザー自身だという点を中村氏は強調する。ケータイを駆使する女子高生を筆頭に、日本はネット上で世界一の情報発信量を誇る。

2020年には東京五輪が開かれるが、中村氏はそこに大きなチャンスを見出している。中村氏が2年前に組織を立ち上げ、推進している「超人スポーツ」(ITやロボット、VRなどの技術を取り込んで、人と機械が融合したまったく新しいスポーツ)を紹介。東京五輪開催に合わせて、超人スポーツ国際大会を開く考えを披露した。

また、2020年の東京五輪は、4K・8K、VR、AR、ロボット、ドローン、IoT、AI、ビッグデータなどの最新テクノロジーを導入するショーケースになり得ると中村氏は見ている。「2020年は、日本が一気にそこへ向けて動き出すチャンスと捉えるべき」と、講演を締めくくった。

3. 文明の転換点――「ソサエティ 5.0」

基調講演に続いて、パネル・ディスカッションが行われた。ディスカッションに先立ち、各パネリストによるプレゼンテーションを実施。順に、水口哲也氏(レゾネア代表、慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科特任教授)、稲見昌彦氏(東京大学先端科学技術研究センター教授)、髙橋征資氏(よしもとロボット研究所チーフクリエータ兼バイバイワールド株式会社代表取締役)が登壇した。

まず最初に、水口氏がVRゲームなどの最新事情と、VRの未来予測についてプレゼンテーションを行った。「VR元年」とも呼ばれた昨年は、「急速に数十年後までの未来予測が可能になった、画期的な年だった」と振り返った。

次に、稲見氏が、これからのVR技術と、VRによって変わる人間の身体性について言及した。VR上あるいはリアルに身体を拡張することが可能になっていくなかで、これからはポスト身体社会が訪れると予想。様々な身体の組み合わせ、すなわち「身体性の編集」が可能になると述べた。

続いて、髙橋氏は、自身が手がけてきたロボット(拍手ロボット「ビッグクラッピー」)やロボット用コンテンツ(「ペッパー」向けコンテンツ)を紹介しつつ、ロボット開発で心がけていることなどについて語った。

プレゼンテーション後、中村氏も交えながら、菊池尚人氏(融合研究所代表理事、一般社団法人CiP協議会参与)をモデレーターにして、フリーディスカッションが行われた。

中村氏は、日本政府が唱える「ソサエティ 5.0」に言及しつつ、「IoTやAIは、産業革命よりももっと大きな社会的インパクトを秘めている」と主張した。狩猟社会、農耕社会、工業社会、情報社会に続く、文明社会の第5段階が来るという、ソサエティ 5.0が描く未来に対し、大きな期待を寄せた。

4. 未来に向けて日本が取り組むべきこと

IoTやAI、8Kといった技術が2030年頃には普及すると予測されるなか、2030年代に向けて日本は何に取り組んでいくべきかについても、議論が交わされた。

「特定の目的達成のためにやり取りをするようなAIはできると思いますが、そこで満足せず、人が喜べるような、情的なコミュニケーションをいかに設計するかを考えていくべきでしょう。単なる目的達成型ではなく、デジタルによって世の中が味気なくならないような視点を持つことが大事だと思います」（髙橋氏）

「日本はこれまで、日本語という障壁によって、逆説的に独自の文化を生み出してくることができました。その日本に、自動翻訳技術などを通して海外から人材がやって来やすくなるので、否が応でも日本の文化はグローバル化の影響を受けることになるでしょう。そこで、あえて情報的なガラパゴス、情報的な島宇宙を作り、魅力的な日本の文化、コミュニティを保ちつつ、海外からの人材も受け入れていく、という戦略が必要になると思います」（稲見氏）

5. どのようにAIと付き合っていくべきか

さらに2045年には、AIの進歩がいわゆるシンギュラリティに到達すると言われている。AIはどこまで発展するのか、そして、これから人類はどのように応じていくべきか、様々な意見が寄せられた。

「AIが進歩していけば、自分のコピーとしてのAIも実現するでしょう。AIによって、その人物の考え方などをコピーすることで、究極的にはわれわれの“寿命”というものがなくなるかもしれません。いわば、デジタル版の“イタコ”のようなものができれば、墓参りをして故人に話しかけるのではなく、デジタル“イタコ”に直接相談するという世界がやってくる可能性もあります」（稲見氏）

「『どんなロボットが欲しい？』と周囲に聞いてみると、女性なんかの場合には、『常に自分の気分を良くしてくれるイケメンロボットが欲しい』という意見が結構あります（笑）。明確な目的があるというよりも、何かあれば気持ちよくコミュニケーションを取ってくれて、幸せな気分にしてくれる。まるで相方が常にいてくれるようなAIというのも、これから求められていくような気がします。AIによって人間が管理されるのではなく、人間が生きやすくなるような世界にしたいですよね」（水口氏）

6. クールジャパンのあるべき姿

IoTやAIを見据えた社会において、どのような人材育成が必要になるのかについても、議論が行われた。

「AIのイノベーションが進めば、自分でルールを読み取ったり、プログラムを書くAIというものが生まれてきます。そうなると、もはやプログラム教育というもの自体が、近い将来には不要となるでしょう。

そうなった時に必要となるのは、AIにどう命令するかというよりも、むしろAIの“気持ち”になって考える教育だと思います。たとえばAIが読み取りやすいような文章の書き方や、AIに引用されやすいような論文の書き方など、AIに最適化していく力を学ぶ。さらに言えば、AIの深層学習が発展していくなかで、人間がAIから新たな教育論を学ぶことになっていくかもしれません」（稲見氏）

最後に、髙橋氏が最近注目している人として、「ギャル電」という女子ユニットに言及した。最近の電子工作は簡単にできるようになっているので、ギャルが自己表現として電子工作を行っているという。

「電子工作で自分の帽子をビカビカに光らせていたりするんです（笑）。非常にラフな感じでテクノロジーを使う集団というのが他にもいっぱい出てきていて、その自由さやバカバカしさがすごく好きですね」（髙橋氏）

こうした議論を受けて、菊池氏は次のように述べ、ディスカッションを締めくくった。

「IoTやAIというと、どうしても冷たい数字の世界になりがちですが、“くだらない”とか“あたたかい”という要素が、特に日本ではユーザーレベルから着々と育ってきているのかもしれませんね。まさにクールジャパンのあるべき姿だと思います」（菊池氏）

ディスカッション終了後は、主婦会館プラザエフ内で懇親会も開かれ、引き続き活発な意見交換が行われた。自由闊達なムードのなか、フォーラムは成功裏に終わった。